

能楽雑感（125）～久也20訓・その十一「他人の謡を聞くことが上達の早道」

2019年08月21日

久也は、師匠の謡をよく聞くことが大切だが、色々な人の、様々な謡を聞くことも大切である、と言っていました。

私は、一時期（数年間ほど）、師匠の谷村一太郎の謡しか聞きませんでした。テープレコーダーが小型化されつつあった時代でしたが、当初、稽古の場でテープレコーダーを持ち込むことがはばかれる時代でしたから、一心不乱に、師匠の謡を聞き取らんと専念していましたが、ある時点から、久也の言葉を思い出して、プロ、アマを問わず、他人様の謡を選び好みしないで、聞くようになりました。乱読ならぬ「乱聞」です。

当初は、ちょっと抵抗もありました。」にとってのスタンダードである師匠の謡と異なる謡が、この世の中に、かくも数多あるものかと驚きもし、不思議でもありました。そして、謡にはそれを謡っている人物の性格が現れることも知りました。自己顕示欲が強い人、逆に、自己抑制が強い人、それぞれが。それぞれの謡いぶりを持っていることを知りました。

しかし、「乱聞」によって、何よりもメリットがあったのは。耳（聴力）が肥えたことでした。

謡曲の上達の基本的な条件は、耳です。「聴くが七分」という言葉を聞いたことがありますが、今にして思うと、他人の謡を沢山聞くことで「筋」が正確かどうかを聞き分けるだけでなく、音程も即座に捕まえられるようになったように思います。

稽古場でおしゃべりに余念のない人達は、私の経験則からすると、概ね上達のスピードが遅いように思います。

久也20訓・その十二～能楽雑感（143）

「謡曲は叙事詩を日本語で朗詠するものであるから、先ずは発音が大事。同時に、イントネーションとアクセントは、日本国内でも地域によって異なるが、先ずは、標準語における発音、イントネーション、アクセントを心掛け、習得しなければいけない。特に、詞には気をつけなさい」

他人様のことを言えた義理ではありませんが、アマチュアの同好会などで、謡は情感が乗っていて聞きほれるくらいお上手なのに、「詞」になると、イントネーションやアクセントがおかしく聞こえる場合が再三あります。

「詞」は、ゴマ点が振られていないので、易しいと思いがちですが、実は大違い。オペラやミュージカルにおいても同じですが、舞台は歌唱だけで進んでいる訳ではありません。むしろ、台詞によって、進行していることを承知しておかなくてはならないでしょう。

「語調」というワードがありますが、それを構成しているいくつかの要素の中で、一番大切なのは、誰が聴いても美しく、日本語らしい「発音」ではないかと思っています。その発音で、頻度的に多い故に、いつも気になるのがアクセント。これは、詞に限らず、謡全般に言えることです。

事例に事欠きませんが、「神」が「紙」になるとか、「端」が「箸」になるとか・・・最も多いのが、「秋」でしょうか。これが、往々にして「飽き」に聞こえてしまいます。「融」の、八丁裏から九丁表にかけて、「秋」が四回も出てきますので、いつも他人様の、このところの謡を聞くとときは緊張してしまいます。

能楽雑感（145）～久也20訓・その十三

「全身全霊で謡いなさい」と叱咤されたことがあります。

一度しか言われなかったと記憶していますが、時々、これを思い出しては、反省の便（よすが）としています。

同系の師導の言葉として、「世阿弥を敬いながら謡うべきだ」と言うのもありました。

節扱いの機微とか、発声の彩（あや）を、生意気にも工夫したりして、独りよがり満足したり、悩んだりしているとき、ふと、この言葉を思い出しては正気に戻り、謡いぶりの軌道修正をします。

思うに、長い歴史的過程を経て磨かれてきた謡いは、西欧のオペラと近似しているところもありますが、発声、即ち、謡がオペラの発声と根本的に異なるのは、声質の良し悪しとは全く関係がないことでしょう。

所謂悪声と言われる、ドラ声、掠れ声であろうと、迫真力に満ちた謡は感動を誘います。

更に、声量の大小とも関係が無いように思われます。

確かに、声量のある人でないと、地頭を務め難いかも知れません。しかし、役謡、独吟などにおいては声量の多寡に関係なく、聞く人を魅了することが可能です。

要は、謡に心が入っているかどうか。

魂の叫びとして、入魂の進境で謡うならば、必ずや聞く人を魅了する筈です。

ましてや、謡本に懇切にもフリガナをしてまで懇切に書かれている詞章を読み違ふことはあり得ないはずです。

謡は声楽であると同時に「祈り」でもあるように思います。

即ち、神仏に訴える魂の叫びであることが、謡の基本ではないか、と、最近しきりに考えます。

典型的な凡人風情の私にとっては、それがなかなかできません。分かっちゃいるけど・・・